

琉球大学学術リポジトリ

「ソロの驟雨」と「黒ダイヤ」をめぐって ーイン
ドネシアへの進駐・再訪・居住

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2012-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/24854 |

「ソロの驟雨」と「黒ダイヤ」をめぐって

——インドネシアへの進駐・再訪・居住

仲 程 昌 徳

はじめに

日本軍がジャワ島に上陸したのは一九四二年三月一日。三月五日には首都バタビヤに入城、そして三月九日蘭印軍は「無条件降伏を決定」しているが、同日、「バタビヤは陥落せり 神の軍隊来るとインドネシアの狂気乱舞」の見出しをトップに掲げた『赤道報』第一号がバタビヤ市で刊行されている。

三月九日第一号を発行した『赤道報』は、四月三日には「神武の佳節」にあたって『うなばら』に改題。同号の「編集室だより」は、「活字に飢え、ニウースに飢えた皇軍に、バタビヤ入城の翌々日から早くも赤道報を贈つて来たが、今日の意義ある佳節に、名も『うなばら』と改めてお目見えすることになった」といい、続けて「従来のような、ニウースの記事のみの編集から脱してこれからはもつとニユアンスに富んだものになりたいと思つてゐる。『文は人なり』と言ふからささやかなこのかわら版ではあるが、今後は屹度明朗にして健康な記事が盛られるであらうことを期待して戴き度い」と改題にちなんでの抱負を語っていた。

『うなばら』は「初期の従軍記者から徴用文学者の手に移り、芥川賞作家富澤有為男がその中心」になつたことで、「陣中新聞としては予想以上に文芸関係記事が多彩」になつていく。「編集室だより」には、「徴用文学者」たちの意気込みがそれとなく記されていたといつていいだろうが、しかし『うなばら』誌の「実質的な運営主体は

ともかく、形式的には第十六軍直属の機関誌であつたこと、また中国をはじめアジア太平洋地域で民族主義諸勢力の抵抗、さらには連合国との交戦が続いていたこともあり、同盟電をもとにした戦争関係の記事が圧倒的に多いばかりか「重要な戦局に関する報道については、当然のことながら大本営発表に全面的に依拠」していた。

『うなばら』の発行目的が、「戦意高揚」「皇軍将兵の士気の鼓舞」「聖戦思想の広布」にあつたことは間違いないが、そこにはまた次のような記事も見られた。

西南太平洋に南支那海に印度沖に帝国海軍が完全な制海権を握り、南方の諸海も波静かとなつたので、南方水産協議会ではこれらの海の資源開発の大綱を決定し、すでにその事業に着手してゐる。大東亜戦のはじまる前は、フィリッピンではマニラ・ダバオ・サンボアンガを中心に一千名、セレベス・北部ボルネオ方面でも数百名に上る邦人漁夫が原住民に伍して漁業に従事し、南方水産物資は日本人の手だけで年額二千萬円に上つてゐた。するうちに戦争が勃発したため全部帰国してしまつたこれらの人々にも再び活躍の舞台が提供されることになり、最近現地の招きにに応じてフィリッピン・セレベス・ボルネオに沖繩県人を主とする多数の第一陣が出動した。今後は昭南島を中心とするマレー半島・スマトラ・ジャバの方面にも続々と海の挺身隊が繰り出され、原住民と協力して海の宝庫を開発する筈で、政府当局も近く統制会社を設立し、これらの南方漁業を統一して組織的に開発方法をすゝめる筈である。

一九四二年六月十日「捲土重来の漁業者 第一陣の沖繩組既に乗込」の見出しで報じられたものである。記事は、帝国海軍が制海権をにぎり「南方の諸海も波静かとなつたので」海の資源開発に着手したといい、「沖繩組」が

「海の挺身隊」の「第一陣」として南方の漁場に出動したことを報じていた。「沖繩組」が、真つ先に出動したのは、大戦前の実績を買われてのことであつたにちがいない。

安里延は、一九四一年六月に刊行した『沖繩海洋発展史』のなかで、沖繩県人の発展は、内南洋だけでなく外南洋にも及び、「シंगाポールに一千二百人、ボルネオに二百人、ジャバに八十人、スマトラ五十人、ヴァタビヤ七十人、セレベス百五十名等である」と書いていた。また、フィリッピンを初め、南洋の島々に働く沖繩県人の足跡をたどつた仲原善徳も『ボルネオとセレベス』の中で、メナドやマカツサルにおける沖繩県出身者の活動について触れていた。

安里や仲原の著書に見られる通り、戦前、インドネシアの島々で多くの沖繩の漁師たちが活動していたことからして、邦人漁夫の「第一陣」として彼等がフィリッピン・セレベス・ボルネオに出動していったのはそれほど特別なことではなかつたといつていいだろう。

インドネシアに渡つた沖繩人は、そのように戦前にも、戦時にも見られたが、同地を踏んだのは彼らだけではなかつた。

兵士としてインドネシアに上陸したものたちもいた。「私は戦争中、スンバ島のボンドコデイという村に、一日本兵として滞在していました」といつたのや「昭和十七年、私は通信省に勤めていました。第二次大戦がいよいよ南方で激しくなる頃です。陸軍から東京と九州の人はインドネシアへ行くようにいわれ、通信省から五十七人が派遣されました。そのうち七人が沖繩の人でした」といつた証言、そして「昭和十七年一月十日、台湾第3部隊へ入隊。同年七月五日野戦転属になり、ジャワ派遣軍、海8942部隊へ配属となりました。本部はスマランでしたが、私たちはレンバンの海岸警備と治安維持にあたりました」といつた証言、さらには「終戦のとき、私はジャ

ワ島西部のチマヒという町にいた。私たちの部隊には、そのとき二百名ばかりの兵補がいた¹⁰」といった記述等から、大戦中、日本軍の一員としてインドネシアに駐留していた沖繩出身者たちがいたことがわかる。

沖繩とインドネシアの関わりは、「十五世紀中葉以後」から始まるとされるほどに古いものである。そこまで遡るまでもなく、近代以降も、漁師たちを始めとして、かなりの沖繩人たちがインドネシアに渡っていたし、戦時には兵士として上陸、駐留したのがいた。

戦後、出征した兵士のなかにインドネシアを舞台とした小説を書いたのがある。その小説は沖繩文学の「戦後の皮切り¹¹」をなしたといわれ、特異な位置を占めることになる。そして、それが発表されてから五十年たった一九八八年一月、かつて「戦後の皮切り」をなしたとしてインドネシアを舞台にして書かれた小説を評した者が、同じくインドネシアを舞台とした小説を発表する。

沖繩の文学の「戦後の皮切り」をなしたとされるのは太田良博の「黒ダイヤ」である。「黒ダイヤ」を「戦後の皮切り」をなす作品と評したのは大城立裕である。「黒ダイヤ」からほぼ半世紀を経て大城は「ソロの驟雨」を発表している。

二つの作品は、同じくインドネシアに進駐した兵士を描いていたというだけでなく、戦争に狩り出された世代の書いたほぼ最初と最後に位置するものたちの作品としても注目されてしかるべきであろうが、まず問われるべきは、何故、彼らはインドネシアを舞台とした小説を書いたのか、ということだろう。

1

「町内の老人会」仲間である私たちは、毎年揃って旅に出ているが、次は「インドネシア」にしたいと言い出し

「とくにソロを加えたいと強調した」のは「私」である。それは「私」が「陸軍少尉としてソロに駐屯していた」ということにもよるが、それだけではなかった。

「ソロ」のホテルについて私たちは、そこで「ブンガワンソロ」の作者である「グサン氏」に日本の作家がインタビューすることになっているという「テレビ撮影隊のグループ」と出会う。「私」は、仲間たちの不満を承知で予定を変え、作家に、同行を申し入れる。「私」もまた「グサンさん」に会いたいと思っていたからであり、「ソロ」には「そのために来たようなもの」だったからである。

「私」は、インタビュが行われることになっている「ソロ河」の河畔で、目をほそめ「河の遠く」を眺めている。「グサン氏」の姿を見たあと「なんとなく背後」を振り向く。そしてそこに広がっていた「風景」に目を奪われ、息を呑む。

「私」は、歌の作者に会うことを止める。

「ソロの驟雨」の前編である。「ソロの驟雨」の前編は、二つの出来事をめぐって書かれていた。その一つが「ブンガワンソロ」の歌詞をめぐる出来事である。

それは「ソロ」のホテルでの作家との会話を端を発していた。「私」は、作家が「ブンガワンソロ」という歌があるでしょう」と言ったのにたいし、「驚きとともにある感慨を催しながら」「もちろん」と答える。「私」の驚きは、作家の一行が、「私」の会いたいと思っていた「ブンガワンソロ」の作者に逢うことになっているということに発しているが、「ある感慨」とは、歌と関わっていた。

「ブンガワンソロ」は「現地で作られた歌」でありながら「敗戦の前後に日本でも流行った」歌であった。歌の流行った原因を「私」は「ジャワのクロチョンとよばれる曲の色合いと日本語バージョンの哀切な歌詞」にあると

思っていて、「ブンガワンソロ」が話題になったとき「私」は「作家の話の先回りをするようですこし気はさした
が、なにかに急かされる思いを」抑えかねて「しかし、インドネシア語の歌詞は、まったく意味が違うのですよね
と言う。

「私」のその言葉にたいして、作家から帰ってきた言葉は、「私」の予測に反するものであった。

そうなんです、と作家は気にする風もなく淡々と相槌をうつて、

「原語では、オランダの植民地支配への抵抗の意味がこめられているのだそうですね」

「え？」

私は意表をつかれて、つい頓狂な声をあげた。

「私」が意表をつかれたのは、「私」が「インドネシア標準語」を多少は学んでいて、「原語の歌詞は日本語バー
ジョンと違って、インドネシアの自然と民族の歴史、文化への賛歌である」ことを知っていたからに他ならない。

「私」が、「作家」に「ブンガワンソロという歌があるでしょう」と話しかけられ、「もちろん」と答えたのには、
含みがあつてのことであつた。「私」は、作家が知っている「ブンガワンソロ」は、「インドネシアの自然と民族の
歴史、文化への賛歌」を歌つた歌としてではなく「敗戦の前後に日本でも流行つた」「日本語バージョンの哀切な
歌詞」であると思つていたのである。しかし、作家から返ってきたのは、全く予期してない言葉であつた。

作家は、「私」が「インドネシア語の歌詞は、まったく意味が違うのですよね」と言うのへ、「そうですね」
と応じ、「原語では、オランダの植民地支配への抵抗の意味がこめられているのだそうですね」と答えたのである。

それは、「私」にとつて、「まったく思いがけない話であつた」。次は、そのあとに続く場面である。

「しかし私が出会つた当時は、そんなことはすこしも知らされていませんでしたよ」

私の口吻には不満がまじつていたに違いない。それを作家はやや冷たく突き放すように、

「それはそうでしょう。いくらオランダから解放されたといつても……」

そのあとの言葉を作家は呑みこんだが、私には痛い思いで伝わるものがあつた。

「私」に「痛い思いで伝わるものがあつた」作家の「呑みこんだ」言葉、作家が云うのを躊躇した言葉は、「私」が「陸軍少尉としてソロに駐屯していた」兵士であつたことを、強く意識させるものであつたといつていい。

「ブンガワンソロ」は、「私」が考えていた「日本語バージョンの哀切な歌詞」でも、「私」が「原語」で歌える「インドネシアの自然と民族の歴史、文化への賛歌」でもなく、「私」の考えた事もないような意味の込められた歌であつたのである。

「私」は、よく知つていると思つていたことが、実は、そうでなかつたことを知つて衝撃を受ける。しかし、それはまだ他人事といつてもいいようなものであつた。「私」が知らないでいたもので、他人事ではないのがあと一つあつたのである。

「ロームシャ」のその後についてである。

私たちは、ソロに来る前、一日だけジャカルタの町で過す。私たちは、そこで「一九六一年から六年をかけて建てられたという、百三十メートルもある塔」の地下室で「前半がオランダとの関わりの歴史、後半が独立後の歴史」

を展示してある「歴史ジオラマ」をみる。

その前半と後半とのあいだに一コマだけ日本軍との関わりの歴史がある。場面の設定は「鉄道敷設」らしい。現地の若者たちを日本軍は労務に徴用した。現地の人たちも「ロームシャ」という言葉を憶えた。いまだにインドネシアの歴史用語になっていることを、私はジオラマの解説文で読みとった。日本軍が解放軍でなく、むしろ圧政を交代したにすぎなかったことを、ジオラマは証言している。

「私」は、「解説文」のなかに読み取れた「ロームシャ」という言葉に触発されるようにして、過去を思い出すことになる。

若手将校として「ロームシャ狩り」をしたときの様子を、ジャカルタのホテルでウイスキーを舐めながら思い出すことになった。独身で働きざかりの若者たちを手当たり次第に狩りだして、かなりの数をジャカルタへ送った。五百キロも離れている先で、ロームシャたちがどのように遇されていたかは知らない。戦後に捕虜になっても戦友たちは語らなかつたし、帰国後も知らなかつた。

それを今になってジオラマで知った。さらに、なかには帰ってこない者もいたと、現地の旅行者の人から聞いた。

「私」は、「歴史ジオラマ」の「解説文」のなかに読み取れた「ロームシャ」という言葉によって、「私」が行つ

た「ロームシャ狩り」のことを思い出すとともに、「ロームシャ」たちの中には「帰ってこない者もいた」ということを知って衝撃を受ける。

「ロームシャ」にちなむ話は、「私」が、直接手を下していたにも関わらずこれまで知らずにいた出来事であった。

「私」の旅の目的は、「ソロがやたらに恋しく」なったばかりでなく「グサン氏に会いたい」と思つて実現したものであった。しかし、「ブンガワンソロ」が「抵抗の歌」であるということを知らされたばかりか、自分の関与した「ロームシャ狩り」が引き起こした犠牲の大きさを知ったことで、「私」は「グサン氏に会うにしても、前々から考えていたように懐かしさだけで会うわけにはいかない」と思いなおす。

「ソロの驟雨」の前半は、そのように、これまで知らなかつた事が明らかにされていくといつたかたちの展開になつていた。

後半は、題名に見られる「驟雨」の襲来とともに幕を開ける。

「私」が、「グサン氏」を目の前にして、会うのを止めてしまふのは、「ブンガワンソロ」の歌のもつ意味を知つたことや「ロームシャ」という言葉が喚起させた過去によるだけではなかつた。「グサン氏」の前から「私」が去つたのは、「ソロ河」河畔に広がる家並みの「風景」が、「五十二年前」の「風景」そのものであつたことによつてゐる。

平屋建ての家々が、あたかも古びきつた玩具を箱詰めしたように並んでいる。瓦葺きもあり、トタン葺きもある。壁は煉瓦積み塗られた漆喰が粗雑に剥けて、広さはいろいろあるが、どれも十坪を越えまい。そのことより、その瓦と壁のかさなり具合が、まさしく私の記憶にある通りなのだ。あの戸口に佇つたことがある、

と私の記憶は語っていた。街から三十分ほど車を走らせてきて河に突き当たる、その一步手前の角の家であった。来るときは気づかなかつたが、方角を変えて眺めたら、たしかにあの場所だ。佇ったところではない、そのなかから一人の若者——ムハルンの背を押して出てきた自分の姿さえ、思い出されたのである。

「ソロの驟雨」の後半は、「ソロ河」の河畔にひろがる「風景」を見た途端、「ムハルン」という名前を思い出し、「驟雨」の到来とともに、「私」がかつて「ムハルン」を「狩り」出したところの「民家」に駆け込んだところから始まる。

「五十二年前」ムルハンを狩り出した場所に立つた「私」は、彼のことを思うとともに「会いたい思いと会うのを恐れる思いとが、交互に湧く」。そして「会うとしたら、詫びることが出来るだろうか」と思う。

「民家」に駆け込んだ「私」は、そこに「十五、六くらいの少年が短パンに上半身あばら骨の出た裸と言う姿で佇っている」のを見て、「ムハルン」と呼びかける。少年は頭を振り、奥に向つて怒鳴る。少年の「母親らしい女」が出てきたので「私」はまた「ムハルン」という。

「私」のおぼつかないインドネシア語と「女」との対話、そして間もなく戻ってきた女の夫「スデイ」とのやはり片言だけの対話で、「私」は「ムハルン」が「帰つてこなかった」ことを知る。

私はもはや言葉を失う思いだった。ロームシヤのなかに帰つてこなかつた者がいた、とはジャカルタでも聞いた。しかし、自分が直接に送つた者にもそれがいたと聞いては、ロームシヤのほとんどがそうだとする認識を強いられただけでなく、その責任をいまもろに問われる思いがした。

「ソロの驟雨」の後半は、「私」がかつて「ロームシャ狩り」をした家で、自分が狩り出した「ロームシャ」の消息を知っていく様子を追っていた。

「ブンガワンソロ」及び「ジオラマ」をめぐって展開する前半、そして後半の「ムハルン」をめぐって展開する元兵士の物語は、自分の行ったことがいかに罪深いものであったかを知っていくかたちになっていた。

「ソロの驟雨」には、「思い」という言葉が頻出する。右の引用文からも窺がえるであろうが、それは頻出するだけでなく、「ソロの驟雨」の核心をなすものでもあったといっている。

「思い」の核心をなす現れを、次のような箇所に見ることができる。

「私」は、作家から「ブンガワンソロ」の歌には「オランダの植民地支配への抵抗の意味がこめられている」という話を聞く前、ジャカルタで「ジオラマ」を見ていた。そしてその解説文から「日本軍が解放軍でなく、むしろ圧政を交替したにすぎなかった」ことを読み取っていて、作家の話に「私」は「私」が「日本軍の一員だった」とを意識させられる。そのあとで「私」は作家に「グサンさんには何のインタビューをするのですか」と問う。作家は「私」の問いに「オランダの圧政のなかで、それへの抵抗を象徴的にこめたという、そのときの気持を聞くのです」と答える。その後、次のような文章が続く。

作家の表情には、私の問いの棘が心に刺さるのを感じとりながらも、たちどころに引き抜いて誇ってみせる虚勢のようなものが窺えた。日本の知識人によくいるように、植民地支配とか軍国主義とかにたいする抵抗の思いを、簡単に口にする手合いが目の前にもいる、と私はいくらか苦々しく思った。私なら、ひたすら詫げる

思いつきもたない。

「ソロの驟雨」を支えている基本的な考えをなすといっている一節である。「私」は、作家の言葉に、「日本の知識人」の軽薄さを見る思いをする。そして「私なら」として「詫びる思い」という言葉が続く。

その「詫びる」は、「詫びる思い」として出てくるもので、決して表に表れてくるようなものではない。例えば「グサン氏に会うにしても、前々から考えていたように懐かしさだけで会うわけにはいかない、と思いついた。あからさまに詫びるといふ白々しいことは避けたいが、気持だけはひそかに伝えたい」といったように、「ひそかに伝えたい」「思いつ」としてあるものであった。

「ソロの驟雨」は、「テレビ撮影隊のグループと出会ったこと」に始まり、「作家のインタビュー番組」を見た感慨で終わるといった結構からなり、「私」と町内会の仲間たち、「私」と作家、「私」とグサン氏そして「私」とスデイといった幾重にも重なる関係のなかで、①「私」と彼らとの間で時に起る、最後まで言うことなく呑み込んでしまう言葉、「唇からふと転がり」出る言葉、「言おうとして」思いつとどまる言葉といったかたちで語られる言葉のもたらず陰影、②グサンのために用意したのを、スデイにやってしまうことになる日本から持ってきたお土産の品物のもつ象徴作用、③「私」「自分」と書き分けられる時制法、④「グサンさん」「グサン氏」と同一人物の呼称を書き分ける心的遠近法といったように、様々な手法を駆使して書かれていたが、あと一つ、見逃せないものがあった。

それは他でもなく、「私」とスデイの家族とのムハルンをめぐる対話を、「私」のインドネシア語に対するに彼らの言葉をジャワ語にしたことである。

何故、「ロームシャ狩り」という痛切な問題を扱おうとしながら、通じない言葉での片言によるやり取りを設定したのだろうか。

それは、多分、頻出する言葉「思い」と関わっていた。言葉にすることは到底出来ないが、「思い」の切実さだけはしっかりと伝わるはずだ、といった状況を現出させる仕掛けとしてである。

しかし、それだけではない。その問題で、すぐに思い浮かべざるを得ないことがあった。それは、他でもなく、沖縄戦について語られる際、必ず問題にされていく「ウチナー口」対「ヤマト口」という構図である。

「ソロの驟雨」の「私」が、兵士として沖縄戦に参加、スパイとして住民を摘発しながらその結果を知らずに捕虜となり、敗戦を迎え、帰還。そして数十年後沖縄を再訪し、「大和口」のわからない老いた人とスパイとして摘発された関係者について話さざるを得なくなつたとき、どのような状況が現出するか。

「ソロの驟雨」は、言葉の通じないなかで、どう「思い」を伝えていくか、その実験をしたものであつたといえないこともないのである。そしてそこには、沖縄戦をめぐる問題として問われ続けてきたよく似た問題が重ねられていたといつていいだろう。

2

山下晋司は、「ブンガワンソロ」について、「日本でもよく知られたクロチヨンの名曲の一つである」といい、その起源、原型、言語、テーマ等にふれたあと「一九三〇年代にはクロチヨンのコンクールなどが行われ」「ブンガワンソロ」の作者グサン・マルトハルトノといったような作曲家が出てきたという¹²。

グサン・マルトハルトノは、「ソロの驟雨」に登場してくる「グサン氏」あるいは「グサンさん」に他ならない

が、山下は、グサンの登場に触れたあと次のように続けていた。

日本軍政期（一九四二―四五年）には、ユーラシアン（ヨーロッパ人とアジア人の混血）の歌手にかわってインドネシア人歌手が登用され、インドネシア語で歌われるようになり、日本軍も反オランダのプロパガンダのためにクロチオンを奨励した。独立革命期（一九四五―四九年）には、クロチオン革命歌とか、クロチオン愛国歌というものがイスマイル・マルズキらによつて作られ、かつてのメランコリックな恋愛歌は、反オランダ闘争と祖国への愛を歌うものになつていった。

「ソロの驟雨」が、「ブンガワンソロ」を枕にしたのは、それがインドネシアを代表する音楽であり「敗戦の後に日本でも流行った」ということによるが、何よりも、兵士の物語であつたことであろう。山下が述べているように、日本軍は「反オランダのプロパガンダのためにクロチオンを奨励した」ことからして、兵士の物語にとつて、これほど格好なものはないといえるからである。しかも、それは「メランコリックな恋愛歌」から「反オランダ闘争と祖国への愛」を歌つたものへと変わつていった歴史を持つていた。「ブンガワンソロ」は、日本軍のインドネシアへの侵略の歴史を照らし出すものでもあつたのである。

「ソロの驟雨」は、ソロを舞台にしたものであつた。そして「ブンガワンソロ」を枕にして、兵士が過去と向き合う物語が展開していくのだが、「ソロ」が呼び出されたのは、「ブンガワンソロ」の歌との関わりだけでなく、半世紀も前に書かれていた遠い物語との関わりも考えられないではない。

ソロ出身の少年の登場する物語「黒ダイヤ」を、沖縄文学の「戦後の皮切り」だと指摘したのは他ならぬ「ソロ

の驟雨」の作者だったことはすでに述べた通りだが、その「黒ダイヤ」の「ソロ」が反映していた、といえないこともないのである。

インドネシアに駐留した兵士を書いた小説が、「ソロ」を出身地とする少年を登場させていることや、ソロを舞台にしていたことは、「日本でもよく知られたクロチヨンの名曲の一つである」歌との関係が考えられないわけではないが、二つの作品が揃って「ソロ」と関わるかたちで書かれているのは、沖縄の作家が、何か「ソロ」にひかれるのがあったのではないかとも思える。

「ソロ」は次のような土地柄であった。

ジャワの中部の小さな二つの土侯国の都、ソロ（スラカルタ）とジョクジャ（ジョクジャカルタ）とに行つてみれば、うすくはあるが伝統文化の匂が生きてただよつてゐる。

このうちソロ国が由緒が古い。十六世紀の末に、大モジョバイト国の後を受けて起つたマタラン国の末裔であるから、まづジャワの王家といふことが出来よう。（中略）

二つの町をならべて、奈良と京都とにたとへることがある程度までは可能にもならう。ソロの方は、奈良の奥深さを求むべくもないとして、とにかく古び燻んでゐて田舎びている

阿部知二の『ジャワ・バリ島の記 火の島』¹³の中に見られるものである。阿部と同じく「徴用作家」としてジャワに入り『うなばら』の編集長になつていく富澤有為男も『少国民南方読本 光のジャワ』¹⁴で「ソロもジョクジャも中部ジャワの南部にあつて、日本でいへばちやうど県ぐらゐの大きさの領土を持つてゐます。両方とも正王と副

王があり、今でもインドネシア人の間では非常な尊敬を集めてゐるわけですが、王城を囲んで、いづれもりつばな都会となつてゐますから、一度は見物に行つてもいい所です」と紹介してゐるように、「ソロ」は、由緒があり、「伝統文化の匂」が漂つていて、日本で言えば奈良にたとえることができる。「王城」の地であつた。そのような「伝統文化」が生きている「王城」の地としての「ソロ」は、古い沖縄の城下町首里を思い浮かべさせるものがあつたのではなからうか。

パニマン少年は、中流以上の家庭に育つた都会人であつた。彼は生粹のソロ——中部ジャワにあるインドネシアの歴史で最も古い王朝を持つ、城下町の生れであつた。

「黒ダイヤ」は、その題名の由来をなす登場人物「パニマン」の出身地についてそのように記していた。そして、その城下町「ソロ」で生まれた「パニマン少年」が「チマヒ練成隊」から「ボジョネゴロ州の義勇軍」を経て「インドネシア武装団」に参加、「レンバンの山岳地帯」における払暁戦に破れて退却していくまでを描いていて、それは、日本軍の「仏印」占領から敗戦・帰還までの時期と重なるかたちになつてゐた。

日本軍が、オランダの植民地政権を倒してインドネシアを占領したのは一九四二年三月のことである。そしてそれから敗戦までの三年五月、日本軍は「軍政を敷いて現地の住民の統治」にあたることになるが、四十二年末、部隊の一部が南東太平洋に転出、兵力が低下したことを受けて、「兵補制度」¹⁵や「防衛義勇軍」の編成に乗り出すことになる。

ジャワ島の統治にあつてゐた第十六軍司令官は四三年十月三日付「治政令第四四号」で「ジャワ防衛義勇軍の

編成」を命じているが、そこには次のような規定がみられた。

第一条 大日本軍ハ大東亜共同防衛精神ニ則リ「ジャワ」五千万民衆ノ烈々タル郷土防衛ノ意氣ニ応ヘ原住民ヲ以テ「ジャワ」防衛義勇軍ヲ編成ス

第二条 「ジャワ」防衛義勇軍ハ郷土防衛ニ挺身ヲ志願スル原住民ヲ以テ編成シ、一部ノ日本軍指導官ヲ附ス

第三条 「ジャワ」防衛義勇軍ハ最高指揮官ニ隸ス

第四条 「ジャワ」防衛義勇軍ハ郷土防衛精神ニ徹シ米英蘭ニ対シ各州郷土ノ防衛ニ任ズ

東門容は、「治政令第四四号」の右の条文を引いたあと「義勇軍の編成の中核は、インドネシア特殊要員教育隊において養成したインドネシア青年であつた。彼等を中心として防衛義勇軍練成隊が設けられ、大団長、中団長、小団長の将校を三段階に分けて二カ月間の教育を行った。次いで幹部教育隊を編成。大団の編成は各州において昭和十九年一月十一日から始まり、第二次、第三次と増員。訓練は日本軍との共生同死の精神を基礎とした¹⁶」と書いている。

防衛義勇軍は「郷土防衛ニ挺身ヲ志願スル原住民ヲ以テ編成」されていくが、その「中核」をなしていくのが「練成隊」であり「教育隊」であつた。作品はそのことを、「この義勇軍の発生に先立ち、まずその幹部を養成すべき教育隊が「チマヒ練成隊」の名称で、バンドンの西北約十軒のチマヒ市に設置された」と書いていた。そして「自分はそこで現地人に日本語を教えたり、マレー語の通訳のような任務を持ったのである」といい、再度「チマヒ練成隊」について「そのチマヒ練成隊には二十歳前後の青年達が義勇軍幹部を夢みて志願してきた」と述べ、

「その中に自分はパニマンを発見したのである」と書いていた。

「自分」と「パニマン」との最初の出合いは、「自分」が「現地人に日本語を教えたり、マレー語の通訳のような任務を持った」りしたことによっているが、「余り目立たぬ存在だった」彼が、「だんだん地味で謙虚に光り出し」てくる。

性質は温順で好感がもたれたが、殊に彼の肉体から発散するものは、素朴な純潔感だった。浅黒い肌理の細い皮膚、五尺三寸位の全体として花車な感じを与えるその肢体は、少女のようにスナナリしていた。

引締まったその綺麗な顔・・・スンダ人特有の黒ダイヤのような瞳！それは柔和と純情を表していた。その黒光りする、瞳の奥に生きているその魂までが黒ダイヤのよう・・・。

「幹部教育隊に志願してきた十八歳の少年」の姿に、「自分」は引き付けられる。そのことは、右の文章から充分に窺えるが、それだけでは、まだ言い足りないものがあるかのように、さらに次のような文章が現れる。

彼は馴々しくすることもなければ、ぎこちばることもなく、何時間話しても倦まることがない。彼は花車な風姿をしていたが輝くばかりの健康に恵まれ、その光沢のある皮膚の下には従順な魂と強靱な生命がいきづいてるように思われた。そしてその精神はいつも清純なもののために緊張していた。

右の文章は、先の文章とほとんど同じだといっていいだろう。それを厭わず繰り返しているのは、「自分」が、

強く少年に引き付けられていたことを示すものであった。

「自分」が、「チマヒ練成隊」に來たのは、「現地人に日本語を教え」るためであり、「マレー語の通訳」のためであった。パニマンとの会話は、「マレー語」によるものか、「日本語」によるものか判明しないが、「何時間話しても倦むことはない」と書いていることからすると、「マレー語」によつていたに違いない。パニマンは、そこまですべて日本語に習熟してなかつたはずだからである。

一九四二年十月四日付け陸軍密六三九七号「南方諸地域に於ける日本語教育に関する件」は、(1) 南方諸民族をして日常生活に必要な日本語に習熟せしめ、我が諸政策の遂行に遺憾なからしめる。(2) 日本語を通じて日本精神、日本文化の浸透を図る。(3) 日本語を大東亜の共通語たらしめ、圈内諸民族の團結強化に資する」ことを明示しているという。「現地人に日本語を教えたり」する任務を帯びていた「自分」が、その「件」について知らなかつたということはないはずであるが、ジャワにおいては台湾、朝鮮、南洋群島などは異なり「学校における正式の教授用語は日本語ではなく、ジャワの地方語ならびにインドネシア語と定められた」ばかりか、防衛義勇軍においても、それは同様であつた。防衛義勇軍は、訓練のすべてを日本軍の「歩兵操典」に基づき、「軍隊用語はすべて日本語を使用した」が、「講義は通訳を通じてインドネシア語で行われた」ということからして、部隊における「自分」の任務は「日本語」の教育より「通訳」に比重がかかつていたはずであり、パニマンとは「マレー語」で話されたに違いない¹⁷。

練成隊の解散で「自分」は原隊に戻るが、全島各地で義勇軍が編成されたことで、再びプリアンガン州の義勇隊へ配置される。練成隊を巣立つたパニマンは、プリアンガンから「三百軒あまり離れている」ボジョネゴロ州へ移り、離れ離れになる。

「自分」が配置されていたプリアンガン州とパニマンがいたボジョネゴロ州との、一九四四年の「人口」を比べて見ると、前者が四二五万六九五・一に対し、後者は一七九万一六〇八である。ジャカルタ特別市を除く十九州のうち、第十五番目の人口数でしかないことからわかるように¹⁸、田舎の部隊にパニマンは移っていたといっている。「自分」は「公用で彼のいる部隊に三週間ぐらいの出張を命じられた」ことで、彼と半年ぶりに会うことになるが、彼は「相変わらず元気で人なつこそうな表情をしていた。同僚達の信望をあつめている様子で、彼の美質を誰よりもよく知っている自分はひそかに嬉しかった」というように、以前とちつとも変わっていないパニマンを見て、嬉しく思う。

小磯内閣のとき独立を容認されたインドネシアが興奮していたのは一年程前のことであつた。それから独立準備委員会ができ……、そしてつい最近のことである。仏印の××で南方軍最高指揮官寺内元帥とインドネシアの指導者スカルノ、ハッタ両氏との間に秘密裡に協議が遂げられたのは、

そして週を出でずして、ある重大声明が此の二人の民族運動の指導者によつて全インドネシアに発せられようとした寸前……東京から沈痛な放送が……

それ以後のインドネシアは混沌だつた。

パニマンとの再会后、インドネシアの状況は一変する。

モハマッド・ハッタは、その回想録¹⁹で、一九四四年九月初旬、東条に代わつた小磯首相が、インドネシアは「後日必ず」独立させる、という放送を行ったことに触れ、「この言葉にインドネシア全土が歓喜したと言つてよい。

ジャカルタではこの声明に感謝する大会が開かれた。スカルノとその他数人のジャワ奉公会の指導者はイカダ広場で演説を行った」と小磯首相の言葉が引き起こした反応を記すとともに、「一九四五年五月に、インドネシア独立準備作業調査会という名の委員会が設置」され、「インドネシア共和国憲法」に掲載する「五原則」²⁰を決定、一九四五年八月のはじめには「インドネシア独立準備会は解散し、これに代わつてスカルノを委員長、モハマッド・ハッタを副委員長とするインドネシア独立準備委員会が結成」され、八月九日、スカルノ、ハッタらは「日本の南方総軍司令官寺内將軍の駐屯地」であつたダラットに派遣される。八月十二日、寺内將軍と会見。「將軍は短いスピーチをしたが、その内容は東京の日本政府がインドネシアに独立を与えることを決定したことを表明するものだった。その後將軍はわれわれに「おめでとう」と言い、幕僚たちもこれにならつた」といい、「数分のうちに菓子が配られて、私たちは共々これを賞味した。この時、スカルノが寺内將軍に、インドネシアの独立に関する東京の決定をいつインドネシア国民に発表したらよいかと訊ねた。それは独立準備委員会のあなた方次第です、と寺内將軍は答えた。何時なりとも、それはもうあなたの仕事です」という言葉を得て、彼らは部屋を後にする。

ハッタの回想録は、その後、四五年八月十七日十時、「ベガンサン・チムール五六番地のスカルノ邸の庭」で「独立宣言文が読み上げられ、インドネシア民族が独立し、国家を持ち、自決権を有することを示す証として、紅白の国旗が掲揚され」「国歌インドネシア・ラヤが斉唱され」群衆が歓声を上げるまでの経緯が記されているが、作品はその経緯を含め「後で知つたのだが」として、スカルノ、ハッタらが「青年過激派のために拉致」されたこと、そのあとジャカルタに現れ「自主独立を宣言」するまでの推移を簡明に要約していた。

作品は、そのように「沈痛な声明」から「インドネシアの自主独立」の宣言そして内閣の召集までを記すとともに、「その当時日本軍の任務は」として、日本軍の動向に触れる。

その当時日本軍の任務は、進駐軍がくるまでの期間の治安維持と、連合国人の生命財産の保護であつてインドネシアの独立運動ということは全く別個の問題であり、實際に於て現地の如何なる事件に対しても何の発言権もなく、一切の政治問題から退場を命じられているのだから、徒らに無関係な国際的な政治感情にまで介入することは無駄なばかりか許されてもいなかった。だから連合国側に誠意を疑われない程度に、当らずさわらず又インドネシアを刺激しないように自発的に出来るだけ狭い範囲に行動を限定し消極的であらねばならなかつた。

徹正中立——これが最良の策であつたが、客観状況は我々の主観通り簡単に我々の立場を維持することができず、次々に発生してくる事件が、我々の存立を困難な立場に追い込んだ。

日本軍は、連合国軍の監督下に置かれ、そのように「一切の政治問題から退場を命じられ」たとはいえ、帰還まで無為の日々を送つたわけではなかつた。戦時中、インドネシアの人々に「共生同死」を求め、一九四五年八月には「独立」を約束しながら、敗戦とともに、旧敵国の命令で、独立運動を鎮圧する側に廻つてしまふ³⁾。

作品は、敗戦直後相次いで「日本人の行方不明」「虐殺」事件、「監禁」「消息」不明等の事件が起こつたこと、バンドンに入つてきた「青年達」と「自分達」が「市街戦を演じ」て、「三日間で彼等を制圧し駆逐した」こと、その頃から「日本兵の中にはインドネシア革命運動に投ずる者があつた」こと、そして「進駐軍」が入つてきた後は、これまで日本軍に向けられていた「抗勢」を、「進駐軍」に向け出し、バンドンでは「青年革命派の行動が表面化してきた」ことを簡明に記していく。

作品に取り入れられたバンドンの「市街戦」というのは、十月十日、「インドネシアの人民治安軍を掃討し市外に放逐した」事件を指すものであろうが、その事件は、「スラバヤにおける大量の武器奪取で気の立っていた民衆を刺激し、ジャカルタをはじめとする民衆の反日空気を刺激した」といい、十月十五日、スマランにおける木戸部隊の制圧に反発して起こった虐殺事件——ブルー刑務所を襲撃、抑留中の日本人百四十九人を殺し、行方不明三十人を出した事件、十月十九日、ブカシで竹下海軍大佐以下の日本人八十六人が殺される事件、十月二十日「カリウンで王子製紙社員ら五十三人が虐殺された」事件を引き起こしたといわれ²²。また「武器引き渡しを要求するインドネシア側との衝突事件において、日本側は十一月初旬までに死者四〇二名、負傷者三三九名、行方不明八四名」をだしたといわれる。これは、「ジャワ攻略戦」における死者が八四五名であったことに比べ、「きわめて高い数字である」とされる²³。

一九四五年九月下旬から十月初旬にかけて、連合軍と蘭印民政府は、ジャカルタに上陸。十月五日に誕生したばかりの「人民治安軍」は、上陸したばかりの連合軍と激しい戦闘が繰り広げられることになる。スマラン、チェブをはじめジャカルタ、スラバヤなどで衝突、バンドンでも英国軍のグルカ兵、蘭印民政府軍と激しい戦いが行われ、「バンドン市の北半分が、イギリス軍とオランダ軍の占領下」におかれ、「市の中心部を東西に貫通する鉄道線路により、二分される」が、連合軍は、「分割ライン」を無視、激しい武力衝突がおこる²⁴。四六年三月「バンドン全市の占領をめざし増強されたイギリス軍は、二〇日、空陸一体の攻撃を強化し、二二日、市南部よりの共和国軍撤退要求の最後通告を送った。バンドンでは、スラバヤやスマランのような徹底抗戦は、この時は行われず、二四日、市南部に火を放って共和国軍はガルト、スメダン、タシクマラヤに後退」していく²⁵。これがいわゆる「バンドウン火の海事件」であるが、作品は、「英国の進駐軍である印度のグルカ兵とインドネシア青年革命派とがバ

ンドン市を中心に鎬を削ってゲリラ戦を展開しつつあったある日」のことを、次のように書いていた。

その日は朝から市内のアチコチで銃砲火の音が絶えず、又英軍機によるインドネシア部落の空襲などが暫々くりかされてきた。

その日の午前十一時頃である。市の北方のレンバンの山岳地帯で、その日の払暁戦に一敗を喫したインドネシア武装団が続々として市の南方に退却してきた。

道路警備で立っている私達の周囲を潮のように、そうした落武者達が雑多な服装、雑多な武器を手にして過ぎてゆくのだった。

進駐軍の命令で「道路警備の任務に服していた」「私」のところに、「一人のインドネシア革命軍の制服を着けた青年」が近づいてくる。「私」は、すぐに彼の名前を思い出す。彼は、落ちつかず「ターベ・トアン」といい、二三歩行きかけて、思い出したように「パニマン」も一緒だという。「自分」は「チマヒで過した」日々を思い出し、彼ならすぐに識別できると思って、青年達の一群に目を向けたが、彼らしいのは見当たらず、失望し、視線を他に向けようとしたとき、「小柄な青年」が近づいてくるのに気づく。

自分はいばらく目前に立ち止まっている人物を判別することができなかった。

汗と土に汚れた服、帽子も冠らないザンバラ髪、心持ちやつれた頬の色……、そして手には小銃を握っている。

その姿にはどこか労苦がきざまれている。

ボジヨネゴロ州の義勇軍で分かれて以来の邂逅で、最初「自分」も判別できないほどにパニマンは変わりあっていた。パニマンの姿に、インドネシアの苦悩が重ねられていたといっているが、別人のようにやせ細った彼の腕をとって言葉をかけると、彼は「スサ」と軽いため息をつき、何もいわずに、「潮のように流れてゆく群衆のなかに消えて」いく。

うら若いインドネシアの少年。

美しい青春と純潔を民族のために捧げて血と埃の中で銃をとったか、傷ましくも健気なその後姿を形容のできない感慨をもって見送っていた。いとおいしい気持ちの雲のように湧いてきて胸をしめつけ、自分はその後をフラフラと追っていきたいような衝動にフト駆られた。

あゝ……黒ダイヤ……

目頭が熱くなった。

作品は、「義勇軍」の解散とともに「インドネシア武装団」の一員として独立革命に参加していった「黒ダイヤ」のような瞳と魂を持つ「少年」への愛慕が描かれていたといっているだろう。

大田良博は「あの頃のわたしの作品²⁶」のなかで、「黒ダイヤ」についてそれが「小説といえるかどうかかわらないが」と前置きしたあとで、「作品と、それに対する批評との、かわり合いを、体験させられた」として、新

川明の「戦後沖繩文学批判ノート」に触れていた。

「黒ダイヤ」は、「フイクションとかロマンとかいわれるものではない。ほとんど事実にもとずいて書いたもので、一種のルポ形式だが、主観のレンズを通してデフォルメされている。主人公の少年像を前面に大映しにして、独立戦争をおしやった。「批評」は、その点をついていく」として、新川が「批評」した点について「作者と主人公の立場が私の私的關係以上に設定されていないため、作品のはげが非常に狭くなっている。民族解放運動の全体の視野から、そのなかで動く主人公（パニマン少年）の具体的存在をとらえるべきだった。作者は本質的に侵略者であった日本軍の局外者の立場から進駐軍たる英軍（侵略者）と戦うインドネシアの解放戦争をみており、インドネシア青年たちの解放闘争の苦悩を内がわから描きえていない」と要約し、それはまことによく「作品の本質」をついたものであり、「その批評のおかげでそれになかった各種の問題点にも私は気づくようになった」と記したあと「作品のむずかしさに思い至る。……荒廃した戦後の沖繩の状況のなから、ムルデカ（独立）の熱気にわきたつインドネシアへの憧憬が、執筆当時の私の心のなかにあったことだけはいなめない」と付け加えていた。

新川明の「戦後沖繩文学批判ノート」が『琉大文学』に発表されたのは一九五四年である。沖繩の戦後文学に関する論が始まっていくのは、新川を始めとする『琉大文学』のメンバーたちによつてだといえようが、「黒ダイヤ」は、彼らの思想を熱く語るのに格好な素材としてあったといつていい。それは、作品では後景になつてしまつたが「荒廃した戦後の沖繩の状況のなから、ムルデカ（独立）の熱気にわきたつインドネシアへの憧憬」が、太田だけでなく、彼らの中にも強くあつたと考えられるからである。

「黒ダイヤ」は、次のように終つてゐる。

アシアは立てり、われらは立てり。

われらの郷土を自ら守れ、

進め進め！

防衛の戦士。アシアの戦士。

インドネシアの戦士。……

Asia Sudah bangun, Merdeka kita, Membela diri tanah air—Kujumadilah, tentaka pembela,

Pahlawan Asia, dan Indonesia.

一群の兵士たちが歌うその行進歌に沈痛な皮肉と哀傷を感じつゝ……、自分は呆然とその場所に立ちつくしていた。

あれから四年——

「自分」は、「行進歌」を聞いて「沈痛な皮肉と哀傷」を感じる。「皮肉」も「哀傷」も多分「防衛の戦士」たちが「落武者の群れ」となっていたことよって生じてきた感慨であったといえるであろうが、もっと具体的な形でいえば「哀傷」は、パニマンの「スサ」という「軽い嘆息」によつて引き起こされた情動につながるものであったし、「皮肉」は、「アシアは立てり」という行進歌の詞によつて引き起こされた思念とつながるものであったといつていいだろう。

「アシアは立てり」という詞に「沈痛な皮肉」を感じ、「スサ」という「嘆息」に「哀傷」を呼び起こされるといったことが、「独立」闘争を内から捕えられてないという「批評」を書かせ、さらには「あれから四年——」と

いう最後の言葉が回顧的であることによって、作品が「自分」の感慨に留まってしまっている印象を強くさせたといえよう。

作品は、パニマンに対する親和の情が強く浮びあがってくるものとなっていた。そしてそれは、「自分」の身近にあったものが、遠い存在になってしまったことへの哀傷・悲愁の情に発していたといっているが、そこには「ムルデカ（独立）の熱気にわきたつインドネシアへの憧憬」が秘められていたことも間違いない。

一九四六年四月、沖繩議会が設置されることになったとき海軍軍政要員ジェームズ・ワトキンス少佐は「米軍政府はネコで沖繩はネズミである。ネズミはネコの許す範囲でしか遊べない」と警告しているという²⁷。一九四二年三月一日ジャワに上陸した日本軍は、三月七日軍政施行を宣言し、翌八日には結社・集会の禁止をうたった布告二号を発令、そして六月には「現地人による政治的言論・行動・示唆又は宣伝の禁止を行っていく」²⁸が、日本軍政期のジャワもまた、アメリカ占領期の沖繩と同じように、「ネズミはネコの許す範囲でしか遊べない」といった状況にあったはずである。

インドネシアの状況は、日本軍政が終焉した時から一段と過酷になっていく。進駐軍は、そのことを見越すかのように、四一年七月には、バンドンに二、〇〇〇名をはじめ、ジャワに在住する日本軍を残留させるようにとの訓令を出している²⁹。旧日本軍兵士たちは、引き続き、激しくなっていく独立運動を目の当たりにしていくことになる。中には、その渦中に飛び込んでいったものもある。

沖繩の状況とインドネシアのそれとは比べることは出来ないが、沖繩にいるものが、アメリカの占領を心地よいものとして受け入れていたとは考えにくい。とりわけ、インドネシアの独立運動を目の当たりにしたものには、「ネコ」の許す範囲でしか遊べない「ネズミ」のような状態は、耐え難いものであったに違いない。

「黒ダイヤ」が、そのような状況のなかで書かれていたことを思えば、ソロ出身の一少年への溢れるような思いに、作者が何を託そうとしていたか、よくわかるものがある。

おわりに

二〇〇三年十月十六日付『宮古毎日新聞』は、「日本領事館誘致にも尽力 平良出身の平良定三さん来島」の見出しで、次のような記事を出していた。

「古里は懐かしい。昔の面影はほとんどなくなつたが、古い漲水神社は覚えていた。また来たい」。旧日本兵でインドネシアのバリ島に住む平良市出身の平良定三さん（82）は、先祖供養の四泊五日の旅を終え、十五日帰路に就いた。（中略）

太平洋戦争中は、陸軍に従軍し、一九四五年ティモール島で終戦を迎えた。同年から、インドネシアの独立戦争に参戦。同戦争後の五〇年、バリ島でプトウ・マータさんと結婚し男二人、女四人の子供に恵まれた。

「黒ダイヤ」は、バンドンに入ってきた「青年達」と市街戦を演じ、彼らを三日間で制圧したと記したあとに「その頃から漸く日本兵の中にはインドネシア革命運動に投ずる者があつた」と書いていたが、その革命運動に投じたものが、沖縄出身兵士の中にもいたのである。

インドネシア独立戦争に参戦した平良定三の足跡に就いては、『世界のウチナンチュ 1』に詳しい³⁰が、彼はそこで「ジャワ島のように大勢生存者がいれば帰国したかもしれない」が「バリ島で生き残つたのは私一人、戦

友の墓守りをする義務がある」と語っている。

インドネシア革命運動に参加して死んでいった戦友たちの「墓守りをする義務がある」としてそのまま同地に残ってしまった平良が、「祖先供養」のため郷里を訪れ、そのことが郷里の新聞に報じられた二〇〇三年には、偶然とはいえ、インドネシアと関わりのある、次のような記事も見られた。

県人が安らかに眠れる墓地の整備に協力を——。インドネシア共和国、スラウエシ島（旧セレベス島）で漁業に従事する宮古出身の長崎節夫さん（60）らが、太平洋戦争前や戦中に同地で死亡した県出身者らの新しい墓地を整備する計画を進めている。異郷で眠る県出身者の墓は現在、無残に荒れた状態。「遠く離れた地に沖縄の漁法を導入した県人の足跡を残し、後世に伝えたい」。長崎さんらは、新墓地整備に県民の協力を呼びかける。

スラウエシ島は、一九一〇年代から終戦まで、県人多数が漁業出稼ぎで移住していた。日本人の墓はピトン市に十四基、近郊のマナド市に十一基、ほとんどが県出身者で、墓碑には「与那嶺亨」「伊礼良貞」「仲村渠蒲」などの名前と享年が刻まれている。

二〇〇三年十二月十二日付『沖縄タイムス』に「異郷の県人墓、整備を インドネシアの墓地、廃棄物まみれ 移転と慰霊碑建立計画 長崎さん呼び掛け」の見出しで掲載された記事の一部である。

翌二〇〇四年八月五日付『沖縄タイムス』は、その続報とっていいかたちで「廃棄物や雑草に埋もれていたインドネシア共和国・スラウエシ島（旧セレベス島）の日本人墓地がこのほど、現地に住む県人らの手で移設・新築

された。募金活動などに取り組んできたスラウエシ島日本人墓地整備会（糸満盛健会長）は、九月に現地で慰霊祭を執り行う予定で、「一人でも多くの遺族の参加を」と呼びかけている」と報じ、十月五日には「スラウエシ島で慰霊祭」の見出しで、次のように報じていた。

戦争などで死亡した県人の墓は同島内に造られたが、戦後、日本人の多くが引き揚げ、九七年に同市在住の水産業、長崎節夫さん（61）に発見されるまでは土砂やごみに埋もれ、無残な状態になっていた。長崎さんや在マカツサル総領事館、日本人会が中心となり七年がかりで墓地を移転、整備し、この日の慰霊祭にこぎつけた。

本部町の城間安子さん（73）の父知念仙時さん（享年四十七歳）は同島で戦死したが、遺骨の行方がずっと分らず、今回、長崎さんらの計らいで墓を新たに造ってもらった。城間さんは「遺骨が入っていないと分かっていても、刻銘された名前を見たら涙が出た。景色もよく、いい所で安心した」と感謝していた。

戦争で生き残りながら郷里に戻らず、現地で死んでいった戦友たちの「墓守」を通した平良定三、そして「土砂やごみに埋もれ、無残な状態になっていた」墓を発見し、新しい墓地作りに奔走し、完成させた長崎節夫、彼等はそれぞれに元兵士、漁師としてインドネシアで暮らしたとはいえ、インドネシアの日本人「墓」に固執する必要はなかったはずである。

平良が、郷里に帰らずインドネシアに住み「墓」にこだわったのは、それが戦友としての「義務」だと思っただけであり、長崎が新しい墓を造ったのは、故郷を離れインドネシアで死んだ「御霊」を安んじるためであることは

もちろん、あと一つには「歴史の保存」ということがあった³¹。

彼らは、そのように、それぞれの思いでもって、インドネシアと関わり、関わったのであるが、そこにはまた、先に見た二つの小説の登場人物のようなかわり方もあった。一方はインドネシアの苛酷な状況を生きる少年への愛慕、一方は戦中に「ロームシャ狩り」をしたことを「詫びる」といったかたちで。そしてそれらは、見事にそれぞれの時代をよく反映していたといえるはずである。

注

¹ 後藤乾一「解題(二) ジャワにおける初期日本軍政と『赤道報』『うなばら』」『復刻版 赤道報・うなばら』(一九九三年九月 龍溪書舎) 所収。

² 木村一信「解題(二)『赤道報』『うなばら』の文芸関係記事について——その概要と特質」『復刻版 赤道報・うなばら』(一九九三年九月 龍溪書舎) 所収。

³ 後藤乾一、注1参照。

⁴ 木村一信、注2参照。

⁵ 一九四二年七月発行、寶雲舎。「セレベス篇 (四)水産業(2)邦人漁業」の項。セレベス地方及びマカッサル地方における「糸満漁夫」の活動について触れている。

⁶ 後藤乾一著『近代日本と東南アジア 南進の「衝撃」と「遺産』』(一九九五年六月第二刷、岩波書店)「第一章 沖繩・南進・漁業」参照。後藤はそこで「沖繩具漁民の南方進出は、彼ら自身の意図に関わりなく、絶えず国

家の南方関心・南進政策に取り込まれていく過程であり、また国家レベルでの日本・蘭印関係、あるいは国際関係の変動の波に翻弄された歴史であった、と総括できるのではないだろうか」と指摘している。

7 「インドネシアへの思い」『Sahabat——沖繩インドネシア友好協会記念誌』一九九九年十月 沖繩インドネシア友好協会発行。

8 「わが心のインドネシア」『Sahabat——沖繩インドネシア友好協会記念誌』所収。

9 「忘れられないできごと」『Sahabat——沖繩インドネシア友好協会記念誌』所収。

10 「皿天皇制と沖繩 小さい天皇たち」太田良博著作集③『戦争への反省』（二〇〇五年七月 発売元（有）ポニーダイナミクス）所収。

11 「(四) 文学 1 戦後の文学」『自一九四五年至一九五五 琉球史料 第九集文化篇1 琉球政府文教局（復刻）』（昭和六十三年九月 那覇出版社）所収。

12 「クロチヨン」宮崎恒二 山下晋司、伊藤真編『暮らしがわかるアジア読本 インドネシア』（一九九七年五月、4刷 河出書房新社）所収。

13 木村一信編『南方徴用作家叢書4 ジャワ篇 阿部知二（一）』（龍溪書舎一九九六年十月）所収。

14 木村一信編『南方徴用作家叢書15 ジャワ篇 富澤有為男（一）』（龍溪書舎一九九六年十月）所収。

15 兵補とは、インドネシア、マレー、ビルマなどで、日本軍の補助兵力として動員された兵士たちのことをいい、インドネシアでは、日本語教育をうけた十六歳から二十五歳までの独身青年の中から選ばれ、日本軍の各種部隊内に編入され、インドネシア国内だけでなく、マレー、シンガポール、ビルマ、フィリピンなどに派遣されたという。終戦後第十六軍当局が連合軍に提出した報告書によると、兵補の総数は二万五千人を数えるという。倉沢

愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』（一九九二年六月、株式会社草思社）「第七章 軍事訓練と農村大衆」参照。

16 『ムルデカ インドネシア独立戦争と日本兵』昭和五十九年五月、本邦書籍株式会社

17 倉沢愛子「第七章 軍事訓練と農村大衆」「第八章 学校教育の充実」前掲書所収。

18 倉沢前掲書「隣組ならびに字常会の数」参照

19 モハマッド・ハッタ著 大谷正彦訳『ハッタ回想録』一九九三年七月 株式会社めこん。

20 スカルノ演説による「五原則の順番」は、「インドネシア民族主義、国際主義または人道主義、民主主義、社会正義、神への信仰」であったのが、「九人委員会はこの順序を変え」て、神への信仰を第一原則にして以下「公正にして文化的な人道主義」「インドネシア統一」「協議と代議制による手段で指導される民主主義」そして「社会正義」の順に変更・整理された。

21 後藤乾一「第五章 日本軍政とインドネシア独立問題」『日本占領期インドネシア研究』（一九九四年七月十日第一刷、龍溪書舎）所収、参照。

22 西嶋重忠『増補インドネシア独立革命』には「木戸」部隊とあるが、増田与著『インドネシア現代史』（一九七一年一月五日、中央公論社）では「城戸」部隊とある。イワ・クスマ・スマントリ著 後藤乾一訳『インドネシア民族主義の源流 イワ・クスマ・スマントリ自伝』には、克蘭ジ駅頭で、急行列車に乗っていた日本人百名が、殺害された「克蘭ジ事件」に関する記述がみられる。

23 西嶋前掲書

24 イワ、クスマ、スマントリ著、前掲書「第六章 インドネシア革命」

25 増田与著前掲書「第四章 一九四五年革命」参照

26 「見ぬかれていた」作品の本質」、『新沖縄文学 特集沖縄の戦後文学』35、一九七七年五月二十四日、沖縄タイムス社。

27 宮城悦次郎「ネコとネズミ——占領者としての意識」『アメリカ人は〈沖縄〉をどう見たか 占領者の眼』一九八二年十二月十日、那覇出版社。

28 「第三章 日本近代化衝撃 三日本軍政」増田与前掲書。

29 大庭定男著『ジャワ敗戦抑留日誌（一九四六～四七）』一九九六年五月三〇日、龍溪書舎。

30 平良定三について琉球新報社編集局編『世界のウチナーンチュ 1』（一九八六年三月一日、ひるぎ社）は「日本語のガイド 独立戦争にも参加」「オランダ軍を襲撃 四年余のゲリラ生活」「ネガラカサトワン事件 三年間、刑務所に」「戦友の墓守り バリ島に永住」架け橋」に」の見出しで紹介している。

31 長崎節夫「墓地建設に協力に対する御礼」『タルシウス』第十号、

主要参考図書

倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』一九九二年六月一日発行、株式会社草思社

後藤乾一著『近代日本と東南アジア 南進の「衝撃」と「遺産」』一九九五年一月二十七日、株式会社岩波書店

後藤乾一『火の海の墓標 ある〈アジア主義者〉の流転と帰結』昭和五十二年三月二十五日、株式会社時事通信社
宮崎恒二 山下晋司 伊藤真篇『暮らしがわかるアジア読本 インドネシア』一九九三年九月五日 河出書房新社

神谷忠孝 木村一信編『南方徴用作家 戦争と文学』一九九六年三月二〇日、世界思想社

モハマッド・ハッタ著 大谷正彦訳『ハッタ回想録』一九九三年七月十日、株式会社めこん

大庭定男著『ジャワ敗戦抑留日誌 一九四六〜四七』一九九六年五月三〇日、株式会社龍溪書舎

後藤乾一『日本占領期インドネシア研究』一九八九年十月一日、龍溪書舎

イワ・クスマ・スマントリ著 後藤乾一訳『インドネシア民族主義の源流 イワ・クスマ・スマントリ自伝』二〇

〇三年六月三〇日、早稲田大学出版部

西嶋重忠『増補インドネシア独立革命 ハキム西嶋の証言』一九八一年十二月三〇日、株式会社鹿砦社

倉沢愛子編著『写真記録東南アジア 歴史・戦争・日本2インドネシア』一九九七年三月二十五日、株式会社ほる

ぶ出版

インドネシア日本占領期史料フォーラム『証言集——日本軍占領下のインドネシア』一九九一年六月 株式会社龍

溪書舎

東門容『MERDEKA インドネシア独立戦争と日本兵』昭和五十九年五月二十日、本邦書籍株式会社

ジョン・D・レッジ著 中村光男訳『インドネシア歴史と現在 学際的地域研究入門』一九八四年五月、株式会社

サイマル出版会

増田与著『インドネシア現代史』一九七一年一月五日、中央公論社

本稿は、平成十六・十七・十八・十九年度科学研究費「東南アジアにおける地域間ネットワークの形成と変遷に関する総合的研究」（研究代表者 安江孝司）による成果の一部である。